

滋賀で人と社会と文化芸術をつなぐプロジェクト“SANPOh”

第5回 文化芸術と共生社会を考えるトークカフェ

「既存の価値観を揺さぶる、障害福祉とアートの現場」

日時：2022年8月22日（月）19：00～21：00

場所：オンライン

参加者：29名（うち、関係者4名）

ゲスト：鈴木励滋氏（生活介護事業所カプカプ所長）

ゲストは、横浜市旭区のひかりが丘団地で「喫茶カプカプ」を運営する、生活介護事業所カプカプ所長の鈴木励滋さん。カプカプでは、喫茶店の運営、お菓子づくり、リサイクル品の販売などのほかに、アーティストを招いて、絵画や歌、ダンス、ラジオ番組づくりなどの活動をしており、これらを通じて、障害のあるメンバーと地域の人々が日常の中で出会う場が作られている。その取組について紹介いただくとともに、理念とされている「障害福祉から世界を変える」という言葉の背景や、福祉とアートの通じるところ、ともに目指すビジョンについて、お話を伺った。

○「障害」について捉え直す

「違い」は個人にあるが、「障害」は関係に生じると考えている。障害の医学モデル*1、社会モデルという考え方があり、私の考えは社会モデル*2と近い。けれど、「社会が悪い」とすると、大きな話になりすぎて自分事として感じられない可能性があるので、個々の差異が関係において障害と見なされることについて考えたい。

自分と相手との違いを、上下や優劣としてしまう価値観こそが、障害の根源ではないかと思う。そんな価値観を許している社会の片棒を担いでいるのはどこかの誰かではなくわたし自身だ。だから「障害を作り出しているのは私だ」と、他人事ではなく自分事として考えるところから始めたい。ただ、それは誰かを生きづらくしている自分への気づきだけではなく、自分の中にも、他者との何かの違いによって、傷ついたりつらい思いをしたりすること（マイノリティ性があること）を発見することにもつながる。つまり何かが違う他者に対して狭量なわたしたちの社会の価値観を多様にしていくのは、自分のためでもあると皆が気づくと、それは社会を変える原動力になると思う。

*1 医学モデル…障害や不利益・困難の原因は、目が見えない、足が動かせないなどの個人の心身機能が原因であるという考え方。

*2 社会モデル…障害や不利益・困難の原因は、障害のない人を前提に作られた社会の作りや仕組みに原因があるという考え方。

○「ザツゼンに生きる」という考え方

カプカプでは、福祉業界でよく「社会適応」と呼ばれる「社会で当たり前とされていることができるよう」に指導することに違和感を覚えている。むしろそこから逸脱していることを面白がりながら世に開き、それに賛同してくれる人を増やして社会の価値観の方を拡張し、逸脱ではないことにしてしまおうと試みている。面白がるとは興味や関心を持つこと。「〇〇でなければならない」というような規範意識と真逆の「ザツゼン」、互いが違うことを肯定し、その違いを面白いこととして受け入れられる「ザツゼンさ」を大事にしたい。

そのため喫茶店でも、メンバーそれぞれがやりたいようにやるという形を貫いている。例えば、常連さんを見つけると引っ張って連れてくるメンバーがいる。他の事業所だと問題行動とされてしまうが、スタッフは止めるのではなく常連さんがその行為を楽しんでくれるような言葉をかけ、「接客」だということにしてしまう。メンバーそれぞれのやり方で自らを表現することで場が作られていて、その場を楽しむためにお客さんがやって来る。

新しいことをやらなければいけないということではなく、今までやっていることの見方を少しだけ変える工夫をして、「こんな喫茶店もあっていいんじゃないの」と思えるようなになれば、価値観を変えていくことができると思う。

○カプカプでのアートに関係する活動

カプカプでは、絵本作家・画家のミロコマチコさん、文化活動家のアサダワタルさん、ダンサー・体奏家の新井英夫さんといったアーティストが定期的に訪問してワークショップを行っている。ワークショップは、ファシリテーターとメンバーと一緒に探りながら、関係を積み重ねていく場であり、メンバーの能力を引き出すというよりも、その人に合ったものを見つけ出す、もともとあった面白さに気づく時間となっている。

メンバーによって得意なもの・苦手なものがあるが、「この人はこういう障害だから」とスタッフが決めつけてしまうとそこで可能性が閉ざされてしまうので、とにかくあれこれ試してみること/選択肢を増やすことを大事にしている。

またワークショップを通じて、スタッフの面白がる力を育て、差異を楽しむ感覚を磨くことを大事にしている。スタッフの面白いと思う範囲が狭ければ、面白いことが起こっていても気づけず、問題行動と見なしてしまうかもしれないからである。

○地域のネットワークに広がる活動

旭区の自立支援協議会の中に、日中活動支援の連絡会があり、生活介護事業所や就労継続支援事業のスタッフが地域の中でお互いの顔が見えるネットワーク作りをしてきた。カプカプにいる時間帯以外のメンバーに何かあった時に、その地域で助けてもらえるような旭区にしていくためにも、ひかりが丘（カプカプのある地域）の人が困った時には、カプカプに駆け込んでもらえば何とかなると思ってもらえるように心がけて来た。顔が見える関係はある程度は築けたので、そのネットワークを用いてチームを形成し、差異が生きづらさと

になってしまう社会を変える方へ、それを稼働させていく段階に入っていると思う。

昨年度、助成金を活用し、カプカプが中間支援に入り、ネットワークで繋がった6施設でアーティスト訪問型のワークショップを試行的に行った。それぞれの施設に手応えや変化を感じてもらえるよう、プロセスを記録として残している*3。参加した施設の中の4事業所で、今年度も活動が続けている。

こうした事業を実施するお金は、文化側より福祉側の方に潤沢にあると考えるが、福祉側ではアートの価値や導入の必要性を感じている度合いが非常に低いと実感している。「アートは福祉の現場の日常を豊かにする」と捉えられるようになってほしい。

*3 記録集(PDF)は、下記 URL からダウンロードできる。

<https://www.facebook.com/kapuhikari/posts/pfbid02F6L3sXgrNmZj5Zo84QWD6T3dhsKFu9K8VkCANBYrE9NxHL19xqn7oK72XA4hQobt1>

○参加者との質疑応答

Q 1 面白いと思う力を持った職員さんが育っていくことが大事だと思った。そこにたどり着くまでの道のりやエピソードがあれば教えて欲しい。

A 1 ワークショップに見守りの立場ではなく参加者として入ってもらう。その他にも、作品展に出展した際には、メンバーと一緒に見に行ってもらっている。アートのことを分からないと思うスタッフに、展覧会の会場で、作品をすごいとか面白いとか思う観客たちに遭遇したり、自分の表現を認められたメンバーたちの様子を見たりなどの体感してもらうことが大事。

Q 2 今後、コーディネーターをどのように増やしていけると思うか。

A 2 福祉側、アート側、どちらのこともよく知ってもらわなければならないと思う。例えば中間支援をする中で福祉寄りだと思う人は、美術館や劇場、映画館に片っ端から行くなど、本当に沢山のものを見ることが欠かせない。一方でアート寄りだと自認する人は、障害がある人の生きづらさのことも、感覚として分かるようになってもらいたいので、とにかく障害がある人たちやその家族に積極的に出会ってほしい。

○参加者の主な意見

・存在の肯定に繋がることを重要視した活動だと思った。文化芸術との相性が良いと言われるのは、文化芸術には正解がなく肯定しやすいからではないかと思った。

・大学での障害者福祉の講義では自立支援や就労支援、障害の特性の話が中心で、アートや文化芸術活動に関しては話題に上がらないので、今回の鈴木さんの話はとても印象的で、福祉の枠組みが広がった。

- ・人とつながることが苦手で、自分だけ、自分の施設だけで取り組んでしまいがちなので、他の人をネットワークに巻き込むことを心していきたいと思った。とにかくつながること、閉じない、開き続けること。